

極小と極大

——災害複合と圏域再編を生きる歴史社会

千葉敏之

西暦一三四八年。その前後を含めてこの年号は、世界史における転換点、すなわちペスト大流行の年として記憶されている。一四世紀半ばの汎流行は、ヴォルガ川流域に端を発し、ジョチ・ウルス軍のクリミア半島カツファ攻囲を機に同港に伝播した。以後は地中海商業を担うジェノヴァ、ヴェネツィアの船と港を経由して、エジプト、ビザンツ、西ヨーロッパに広まった。一日平均四〇キロの速さで広がるペスト菌は、環地中海世界の主要港に辿り着き、そこから今度は河川交通を介して、内陸へと進んだ。

ペスト流行は多くの人口を奪ったが、感染による病死だけがその原因ではない。中東では、寒冷化や湿潤化といった気候不順、降雹などの小災害の頻発、乾燥化を原因とする蝗害、地震や津波、洪水や河川の氾濫などの水害が複合することで、人々は生存の危機に瀕した。ヨーロッパでもこの時期、寒冷化を背景とする農業危機が広がり、飢饉、

農民逃散、畑や村落の放棄といった現象が見られた。流民と化した農民は近隣の都市に貧民として吸収されるか、一揆の暴徒と化した。

複合する災害がもたらす危機を、ペスト禍が及ばなかった元朝も経験していた。一三四四年、黄河下流域では大規模な洪水が発生した。大雨は続き、流域に相次いで水害をもたらし、加えて地震までもが地域を襲う。複合する災害は地域の農作物を直撃し、村や町は重篤な飢饉に見舞われた。地獄絵図のごときその有様を、トルコ系遊牧集団カルルク出身のナセンが歌う。

市中では一斗の粟は一〇貫の値をつけ／飢えた人々は
野草を煮て朝餉とする／木の皮は剥ぎ取られ草の根は
かじり尽くされ／妻と子は見つめ合つて悲しみに暮れる
〔颯州老翁の歌〕井黒忍訳、『1348年』二九七頁

こうした生存危機に、人々はただ戸惑い、悲嘆にくれ、無力でいた訳ではない。ボローニャ大学やパドヴァ大学などヨーロッパの医学部はペスト対策を示し、パリ大学が『ペスト意見書』に取りまとめて、各地の行政府に送付した。

その旗振り役を務めたのはローマ教皇クレメンス六世であったし、その教え子、皇帝カール四世であった。中東でも君主と医師がさまざまな対策を講じ、元朝では徴税免除や米粟支給が実施されるだけでなく、中央から派遣された御使などの役人が自らの眼で地方の実情を見分し、窮状からの立て直し策を立案して国に上申していた。

一方で一三四八年には、全ユーラシアに覇権を敷き、ヨーロッパと東アジアを繋いでいたモンゴル人の超広域帝国が、宗主国である元朝とイル・ハン国、チャガタイ・ハン国、ジョチ・ハン国の三ハン国に分裂していた。ゆえに「衰退期」と評されるが、モンゴルはその統合過程から明らかのように、元来、分裂しやすい国家構造をその本質としていた。この分裂からティムール、ムガル、オスマン朝が出現する過程は、チングス・カンの血統原理を引き継ぐ、ユーラシア政治秩序の再編と位置づけられる。

同じことは、一三四八年の東南アジア地域にも当てはまる。一四世紀に東南アジアでは、温暖で適度に湿潤な好気候に立脚したアンコール朝などの旧来型国家が解体し、寒

冷で乾湿の不順な小氷期に耐性を持つ新興国家が勃興した。国単位では崩壊や滅亡であるが、地域全体で見ると、新たな気候条件への適応のプロセスと解釈することができる。

このように世界を見渡すと、一三四八年が、ペスト禍を含めた、寒冷化という気候不順を遠因・近因とする災害複合と、気候変動に連動して進む大圏域の組替えの時代であることが分かる。そのなかで、小さき人々は、終りの見えない災害の連鎖、経済や政治の動揺、飢えや親・子供の死という絶望の日々に耐え、逞しく抗いながら、手に手を携えて生き抜いていく。極小の生活史と極大の構造変動を因果の環で繋ぐこと。これこそが、一三四八年の世界の実像を捉えうる、確かな視座なのである。

千葉敏之 総合国際学研究院教授 ヨーロッパ中世史

文献案内
千葉敏之編『1348年——気候不順と生存危機』山川出版社、二〇一三年
ジェームズ・C・スコット『反穀物の人類史——国家誕生のディープヒストリー』立木勝訳、みすず書房、二〇一九年

